

特別養子縁組で子どもを迎える

～特別なことじゃなく、子どもとの出会い方が少し違うだけ～



渡辺 智美さん
長男 雄大くん
(41歳・2歳)
〈市外在住〉

【渡辺さんの場合】

- 31歳 ● 結婚
- 32歳 ● 不妊治療開始
タイミング法
体外受精(3回)
- 35歳 ● 不妊治療終了
- 36歳 ● 長女を引き取る
- 39歳 ● 長男を引き取る

不妊治療に区切りをつける

結婚前から生理不順で産婦人科に通っていたので、結婚後不妊治療を始めたのは自然な流れでした。

不妊治療をしているときに、テレビで里親や特別養子縁組のことを知りました。体力的にも金銭的にも大変だったので、3回目の体外受精をするときに「これがだめなら終わりにしよう」と決めていました。そのときは「みんなが当たり前前に産んでいるのに、何で私だけ産めないんだろう」と落ち込みました。

我が子との出会い

それでも、自分の手で子どもを育てたいという思いがあり、特別養子縁組で子どもを迎えようと動き出しました。児童相談所の里親研修に半年間参加し、里親認定を受け、翌月長女を迎えることができました。長女は、生まれた5日後に初めて会い、退院の日を迎えに行きました。長男を迎えたときは、産んだお母さんがぎりぎりまで悩んだようで、生まれてから12日たっており、その日のうちに役所へ届けを出さなければならず、すぐに名前を決めて引き取ることになりました。

どちらの時も、産んでくれたお母さんの代わりにちゃんと育てなさんと責任を感じました。

やっと実子になった日

特別養子縁組は、里親研修、里親として子どもを委託されるかどうか、実子になるための裁判所の審判など多くのハードルがあります。それでも、

実子が欲しかった。

実子になったとき、「やっと」という思いと同時に「ほっと」しました。これで、自分の子どもになったと安堵しました。

子どもたちがもたらしてくれたもの

特別養子縁組をすると決めたとき、母は賛成でも反対でもないと言っていたのですが、子どもが来てからは、メロメロで私と取り合いで世話をしたほどです。以前は、あまり行かなかった実家にも子どものおかげで毎週行くようになりました。

夫も、家事をあまり手伝う人ではなかったのですが、洗濯物を干してくれたり、休みの日は子どもを外へ連れ出してくれたり、とても協力的になりました。

誕生日は1年に一度、感謝し願う日

子どもの誕生日を迎えると、産んでくれたお母さんのことを思います。「元気に育てていますから、安心してください」と心の中で伝えています。こうしていろいろな場所で話していることで、いつか産んでくれたお母さんに届いたらいいなと思っています。

里親の話を聞きに来てください

里親や特別養子縁組をしようか迷っている人、ぜひ、体験発表会へ来てください。里親や特別養子縁組をした方の話を聞けば、**子どもとの関係が特別なことではない**ことが分かるはず。血のつながりのある親子と何ら変わりません。**ただ出会い方が少し違うだけ**です。

▶ 特別養子縁組

何らかの事情で産みの親が育てることができない子どもに対して、生涯に渡り安定した家庭で愛情に包まれて育つために作られた公的制度です。子どもの最善の利益のために、産みの親との親子関係を断ち、家庭裁判所の審判によって、育ての親と新しい親子関係を結ぶもので、戸籍上、実親子とほぼ同様の形式を取ります。

里親・特別養子縁組に関する問い合わせ

愛知県東三河児童・
障害者相談センター
☎0532-54-6465